

## 海のエピソード 鴨川海浜植物 ~つるくさ~

### 海岸の謎のつる草

前回の海岸づくり会議のとき、参加者のIさんから「最近、海岸の植物に黄色いつる草が張り付いていて、鴨川の海岸にもとから生えているハマゴウを枯らせる原因となっているようだ。」との情報をいただきました。さっそく会議後に砂浜に急行したところ、謎の植物を見つけました。黄色い綿のようなものが、ハマゴウを覆っていたのです。

これは、遠目には人工ゴミにも見えたのですが、近づいてみると、もやしの根の先のようにさくさくした触感のつる草でした。ハマゴウにふわふわと覆い被さるだけでなく、枝には、つる草の根が食い込んでいました。根を張るのが、地面ではなく、ほかの生物体なのが寄生植物の特徴です。森の木に絡み付いているヤドリギ(宿木)もその仲間、取り付かれた木は衰弱してしまいます。寄生植物が黄色や薄緑色をしているのは、自分で栄養を作らなくてもいいからです。宿主から栄養を横取りするので、光合成で自分で栄養をつくるための葉緑体などの色素が不要なのです。

鴨川の海岸の「謎のつる草」の正体は、おそらく“スナヅタ(砂蔦)”か“アメリカネナシカズラ(亜米利加根無蔓)”のどちらかと考えられます。スナヅタは、元々に日本の南部の海岸に生息する寄生植物ですが、鴨川で近年急に目立つとの情報からすると、分布域が北上している可能性があります。アメリカネナシカズラは外来種ですが、日本での分布域が拡大しているようです。外来種の植物は、人間や物資の移動にともなって侵入するもので、セイタカアワダチソウなどが有名です。当地の環境条件に合うと、爆発的に繁殖し、日本列島に元々生息していた生物を絶滅させる勢いで増えることがあります。



植生帯に繁茂するつるくさ

つるくさに覆われる海浜植物



『アザラシに注意!』の看板



ヤドリギ

**日々の観察の目が地球や地球の環境変化を見出します！**

海岸づくり会議でいただいた謎のつる草の情報から、鴨川の環境の変化が推測できるかもしれません。温暖化か、外来種が侵入しやすくなったのか。これは、毎日のように長い期間にわたり海岸の観察をされてきた方々の存在があってこそ、初めてわかったことです。

最近、ネットワークで国内外の情報を共有して、植物の分布域や動物の移動を調べる市民参加の調査も増えてきました。たとえば、鴨ちゃんやタマちゃんなど“アザラシ”の分布や移動は、多くの市民の観察眼のおかげで個体単位で明らかになりました。

近年のように、温暖化だの気候の異変だのが起きると、「いつから？どこから？なぜ？」が話題になります。しかし、地域の生態系の異変は、人間の営みによって地域環境がすぐに影響を受け、地球規模で変化した予兆なのです。気候も海面も移り変わるものだ、と過去の記録は示しています。しかし、あまりに急激な変化が起きると人間の生態、つまり人間生活も変化に追いついていけなくなります。

海岸の植物、ウミガメ、魚など生態系の観察結果を、他のデータとあわせて調べていくと、思わぬ発見がありそうです。是非、地域の皆様の鋭い観察眼による情報と、海岸づくり会議での情報をあわせると、自然の仕組みや変化を多くの方と共有できる可能性があると思います。

〔写真・文責〕 清野 聡子